

キトラ古墳壁画の公開と アンケート結果の考察

はじめに 2016年9月24日、国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区が開園した。その中心施設として国土交通省により整備されたキトラ古墳壁画体験学習館「四神の館」には、地階に展示施設、1階に文化庁が設置したキトラ古墳壁画保存管理施設（以下、文化庁施設と呼ぶ）がある。奈良文化財研究所はキトラ古墳の整備事業のほか、四神の館の展示について製作段階で協力をおこない、文化庁施設についてはその運営と公開に関する業務を文化庁からの受託事業として実施した。本稿はそのうち公開事業の概要を述べ、アンケート結果から参加者の評価や動向について考察する。

公開事業の概要 文化庁施設での公開は展示室でおこない、文化庁の指示や協議にもとづき、壁画公開期間と壁画非公開期間とでは異なる内容、方法で実施した。

壁画公開期間中、見学者は展示室でガラス窓越しに壁画の実物を観覧できる。多数の来場が予想されたので、混乱を避けるために事前申し込み制とし、文化庁が契約した事業者が事務局を担当した。壁画実物のほかに、壁付の展示ケースには出土品などを展示した。

壁画非公開期間においては、壁画保管室の照明を消し、展示室の3面のガラス窓のうち両脇のガラス窓は遮光した状態となる。展示室内および展示ケースに石室閉塞石の破片や盗掘時期を示す土師器、副葬品のレプリカ等を展示し、中央の窓からは薄暗い壁画保管室の様子を見る能够な状況で、展示室を公開した。

第1回の壁画公開は2016年9月24日（土）から10月23日（日）までの28日間実施し、期間中2日間は点検等のため閉室した。壁画は開園を記念して特別に天井（天文図他）、南壁（朱雀他）、西壁（白虎他）の3面を公開した。展示ケース内は刀装具等の出土品と、金銅製品や大刀の復元品等を陳列した。会期中の参加者は19,040人である。

第2回は2017年1月22日（日）から2月19日（日）までの27日間で期間中2日間閉室とし、北壁（玄武他）と出土遺物等を公開した。参加者は10,976人であった。

アンケートの概要と分析 壁画の第1回公開の会場において事務局がおこなった参加者へのアンケート集計結果から、評価や動向などをみてみよう。アンケートは壁

画の見学後に出口付近で実施し、計13,793人から回収した（回収率72.4%）。

参加者の住まいは、上位から順に大阪府（2,640人、以下カッコ内の数字は回答数）、奈良県（2,530）、兵庫県（1,004）、東京都（818）、愛知県（811）、京都府（756）、神奈川県（458）となった。日帰りできる近畿圏を中心に遠隔地の関東地方や中部地方も多い点は、キトラ古墳壁画の人気の高さや全国ニュース等で取り上げられたことの影響等が考えられる。また国は特定できないが、海外が6人おり、インバウンド振興の観点からも注目される。

参加者の年齢層は男女ともに50～60代が多い（図28）。注目すべきは、20～40代の女性（計2,335）が同世代の男性（計1,206）の約2倍だったことである。会期は平日が主なので、歴史や美術に関心が高い、あるいは時間を融通しやすい主婦層が多く来場したのであろうか。

公開を何で知ったかに関しては、新聞（5,213）、テレビ（3,330）、文化庁HP（2,084）、知人・友人から（1,219）の順である。修理後の初の壁画公開である点や国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区の開園という注目度が高い状況のなか、マスメディアへの露出が多かったことが奏功したといえよう。知人・友人からという回答が多いのは、口頭伝達だけでなく、電子メールやSNSなどの連絡手段の普及が要因とみられる。逆に、想定以上にポスター（733）、チラシ（119）での認知が少ない。従来はこれら印刷物での広報に力を入れていたが、今後については検討課題であろう。

利用交通手段は、自家用車39%（6,268）、電車36%（5,738）、バス9%（1,448）、自転車5%（802）、徒歩5%（754）、タクシー3%（495）となっており、マイカー利用が多い。飛鳥駅から直通バスも運行され、利用者には好評だったが、増便希望の意見も多かった。また、飛鳥資料館との連携や飛鳥地域の観光振興という観点からは、キトラ古墳地区と飛鳥資料館方面を直通で結ぶ路線がないことは利用者には不便である。

見学時間は1班10分と定めており、見学時間がちょうど良い76%（10,149）、短すぎる23%（3,040）、長すぎる1%（98）となった。第1回公開は壁画3面の公開だったため、じっくり見学するにはちょうど良い時間だったようだ。約四分の一の参加者にとっては、もっと見ていたいと思わせる壁画でもあったことがわかる。

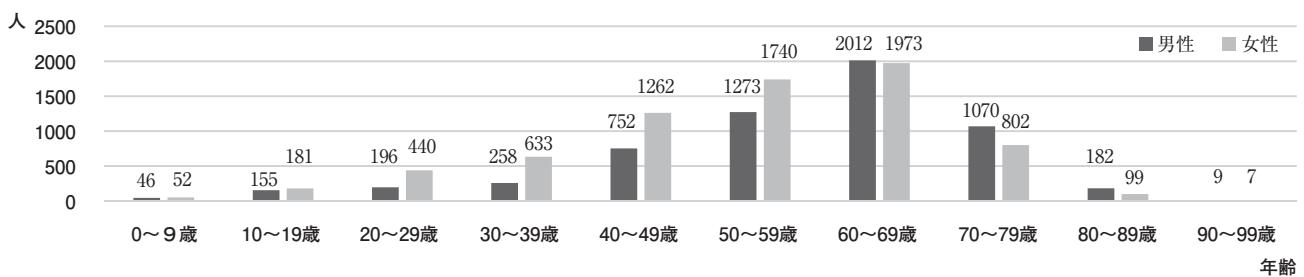


図28 参加者の性別・年齢層分布

その他にまわった周辺施設は、上位からキトラ古墳(7,659)、高松塚古墳(7,470)、高松塚壁画館(4,532)、国営飛鳥歴史公園館(3,470)、飛鳥資料館(2,971)、奈良県立橿原考古学研究所(1,625)、平城宮跡資料館(1,589)、明日香村埋蔵文化財展示室(1,287)、藤原宮跡資料室(958)、橿原市藤原京資料室(850)の順となっており、高松塚地区とともに、考古学に関する展示施設が多い。一方で、石舞台古墳(223)、飛鳥寺(68)、奈良県立万葉文化館(25)などはあまり足を運んでいないという結果だった。立地や距離からすればもっと多くてもよさそうだが、参加者の嗜好が考古学関連の展示施設に向いていることが特徴である。

また、奈良国立博物館(6)、奈良公園(3)、東大寺(2)などは低調で、奈良市の観光名所をあまり訪れていないことが読み取れる。近畿圏からの参加が多いため、飛鳥に来て県内の他地域はあまり巡らず日帰りする、という行動パターンが類推される。

展示に関する5(良い)から1(良くない)の5段階評価についてみてみると、公開している壁画や遺物そのものについては良いという評価が主だった。見やすさについては、5が39%、4が33%のほか、最低の1は1%であった。西壁と南壁はややガラス面から遠かったこと、天井天文図をのぞき込めない構造であったことを鑑みれば、十分な高評価といえる。壁画を見やすくするために西壁と南壁は展示台を30°起こした。天井の天文図はドーム状(舟底形)の形状であるために展示台を起こせないので平置きし、参加者から星宿の金箔が輝いて見えるようライティングを工夫した。また、展示室内に踏み台を設けるなど、少しでも見やすくなるよう工夫した点も評価されたと考える。

事前申込制については5が40%、4が32%であり、最低の1は2%にとどまった。飛鳥資料館や東京国立博物館での壁画公開が数時間待ちの行列だったので、手続きがいささか煩瑣とはいえ、確実に余裕をもって見学できる申込制は一定の評価を得たといえる。

配布したリーフレットは5が41%、4が37%、最低の1は1%未満と、概ね好評だった。リーフレット作成にあたっては、壁画の写真ができるだけ大きくしたり、わ

かりやすい解説となるようにつとめた。

このほか自由記述では、無料公開にも関わらず、地階展示室とともに、有料でも良い内容だという意見が多数みられた。また、壁画を見て感動した、文化財にあらためて関心をもった、修理の大変さや大切さを感じた、といった意見も多かった。それに対し、公開の告知が足りない、対応が悪い、文字が小さい、解説がほしい、英語が必要、などの意見も複数あった。

課題と今後 手探りで始まった第1回公開は、総じては好評であった。重大な事故等もなく無事に終了できたのは幸いであり、あらためて関係各位に感謝申し上げたい。

もちろん改善すべき点や課題もあった。たとえば、第1回公開の際に、運営側では参加者がまず地階の常設の展示室を観覧して、予備知識を得たうえで、壁画公開に参加するという動きを想定していた。そのため文化庁施設の展示室には最低限のキャプションしか設置せず、壁画そのものとじっくり対面する空間として整えた。しかし参加者の様子を見ていると、実際には地階を見ずに壁画公開に参加する場合も多かった。指定された集合時間にあわせて来園し、まず壁画を見るという動きである。また、地階を見ていたとしても、壁画のそばに解説があったほうが良いという印象をうけた。

そのため第2回公開では、事前に地階見学を促す旨をチラシやホームページ等に記載した。また公開する北壁1面だけでは10分間でも時間を持て余すので、石室閉塞石の破片や盗掘に関連する出土品、解説パネルなどを展示し、見学時間いっぱい楽しんでもらえるよう工夫をおこなった。

見学者には第一級の古代絵画であるキトラ古墳壁画の実物と対面する時間を味わってもらうことが、何より重要であると考える。展示や解説については、集計中の第2回公開のアンケートも踏まえ、今後さまざまな手法を試みていきたい。また、文化庁施設において壁画公開や壁画非公開時の展示をおこなうだけでなく、多様な調査研究をおこなってきた奈文研のリソースを最大限に活かし、飛鳥資料館と連携した展示などでキトラ古墳地区と飛鳥資料館の双方の魅力を高めていきたい。

(菊地智慧・石橋茂登・金旻貞・柳田明進)